比較して高度の吸収障害が長時間持続しているのが特長であるが，ゴマ油注入犬では最初の8時間は比較的緩徐であった．なお少数例ではあるが，胃腸管出血について^{32}P，RISAの吸収を観察したのであわせ報告する．

94. RIによる肝疾患時の消化吸収試験（第2報　膵外分泌機能との関係）

○中川昌壮，木下　陽，普天間　稔
木原　彊，川口正光
（岡山大学・小坂内科）

第2回核医学研究会で肝疾患時の消化吸収試験の結果急性肝炎の黄疸発現期および肝硬変で門脈高血圧著明例においてとくに^{131}I-triolein排泄率が高値を示し，脂肪の消化吸収障害のあることを報告したが，今回は，肝疾患時の膵外分泌機能と^{131}I-triolein による脂肪消化吸収との関係を追究した結果を報告する．

膵外分泌機能はSun Shayの方法に準じたpancreozymin-secretin testで膵液量，重炭酸塩最高濃度，アミラーゼ排泄量の3つを測定し，そのうち，1つでも低下のある場合は膵外分泌機能低下とした．脂肪消化吸収試験は^{131}I-triolein（50～100μc）を経口投与し，4日間の糞便中排泄率を測定し5%以上を消化吸収障害と判定した．健康人16例の7日間の糞便につき粗脂肪排泄量は1日当り5g以下であり，したがって5g以上を脂肪便とすると^{131}I-triolein排泄率5%以上のものはほとんど5g以上の排泄量を示すので，本報告では^{131}I-triolein排泄率5%以上を示す糞便を脂肪便と定義した．検索対象は，対照8例，慢性膵疾患6例，急性肝炎6例，慢性肝炎7例，肝硬変11例，計38例であった．postsecretin 60′-periodの膵液量についてみると膵疾患，急性肝炎の1部において低下を認めた．postsecretin 60′-periodの重炭酸塩最高濃度は膵疾患では全例低下，急性肝炎，肝硬変の1部で低下を認めたが，脂肪便の大半は，3項目とも正常であった．各疾患のpancreozymin-secretin testの異常頻度は慢性膵疾患6例中6例，急性肝炎6例中3例，慢性肝炎7例中1例，肝硬変11例中4例において低下を認め，さらに各群について脂肪便の頻度をみると，肝硬変では膵機能正常7例中5例に脂肪便をみる反面，低下群では4例中2例のみである．これは肝硬変における脂肪便の成因として膵外因子，すなわち門脈高血圧による鼓腸，運動異常等の因子も関与するものと考えられる．

95. 2～3の疾患におけるリサテストの成績

○片山健志，斎藤　実
（熊本大学・放射線科）

われわれはリサテストが膵臓疾患の診断に用いられるかどうかを検討するために機会あるごとにその成績を発表してきたが，本法が一種のタンパク吸収試験であるために膵臓疾患以外の消化器系疾患によってもその成績が左右されることは当然である．

今回は膵臓疾患以外の2，3の疾患についての成績をまとめた結果を報告する．

検査方法：あらかじめルゴール液投与ののちゲラチン加^{131}I-アルブミン100μcを経口的に与え，経時的に肘静脈より採血し，放射能を測定して血中濃度を計算した．

成績：1）肝障害（12例）5例に低下を認めたが，このうち4例は中等度の肝障害があった．正常値を示した7例の中に中等度以上の肝障害が認められたものが3例あった．

2）他にとくに合併症の認められない低酸症または胃炎（12例）3例が各時間値とも低下したが，1時間値に低下を認めたが2時間以後の値は正常であったもの2例，1時間値が正常で2時間以後の値が低下の傾向を示したもの1例であった．

3）胃癌（27例）

a）膵，肝に異常を認めなかった14例で，4例に各時間値の低下を認めた．1時間値のみ低下を認めたものが4例であった．

b）膵に癌の浸潤を認めた7例では4例に明らかな低下，1例に軽度の低下を認めた．

c）膵に癌の浸潤があり肝障害の合併があった6例ではすべての例にかなり著明な低下を認めた．

96. 腹膜の機能に関する研究

山川邦夫，内藤聖二，岩田竜三郎
斎藤敏夫，中島郁子，寺元　彪
津田靖彦，石原明夫
○青木誠孝，有山　襄
（順天堂大学・山川内科）

腹膜を介して物質の移動が行なわれ，血液内諸物質に対する腹膜の透過性と，腹腔内注入液の滲透圧による容積変化に関しては，古くより知られた事実であるが，腹腔内での諸物質の交換過程は，拡散や滲透等の物理的解

Presented by Medical*Online